

小島弘道会長還暦記念特集

昨年（2003年）、小島弘道会長が還暦を迎えられたことを記念して、本巻では小島会長の研究の足跡を振り返ることとした。1960年代後半から40年近くにわたる研究の足跡は、小島会長独自の視点がその時代の学校経営の実践・制度・研究の趨勢と切り結んできた軌跡である。

この間、学校経営が文部省対日教組の対立構造に位置づけられざるを得なかった高度成長期から、1990年代以降の「基調の変容」を通過した自律的学校経営の時代へと、学校経営とその環境は大きく転換した。教師や保護者、子どもの意識と行動も大きく変化した。その中で学校経営研究の中心的なテーマや研究方法も変化するとともに、そのあり方がくりかえし問い返されてきた。

小島会長は、本研究会は言うまでもなく、日本の学校経営研究をリードされてきた。日本教育経営学会の事務局長、編集委員長、会長等を歴任し、この間日本教育経営学会が刊行した二度の講座（『講座日本の教育経営』1986年、『シリーズ教育の経営』2000年）で編集委員を務められた（ちなみに、この両方の講座で編集委員であったのは小島会長のほかは中留武昭九州女子大学教授・九州大学名誉教授のみである）。日本教育学会、日本教育行政学会、日本教育法学会、日本教師教育学会などその活動の場と研究のテーマは幅広い。実践的な面でも小島会長が精力的に研究し、提言してきたスクールリーダーのための大学院が現実のものとなってきた。

小島会長の研究を振り返り、再検討することは、単に個人の研究史をひも解くということではない。それは高度成長期以後の日本の学校経営研究の軌跡を振り返るということであり、そのことを通じて現在の学校経営研究の到達点と課題を照射し、さらにその中で後進の研究者が自らの位置と進むべき道を探るということである。

本特集では、昨年の夏季合宿における講演の記録という形で小島会長に自らの研究を振り返っていただくとともに、北神、浜田、加藤の各会員がそれぞれのテーマから小島会長の業績を検討している。3名の会員は1970年代の後半から2000年頃にかけて、それぞれ時期を異ならせながら大学院において小島会長の指導を受けた。それぞれ思い入れのある論稿である。そこでは、個人史が相互に絡み合い、研究の軌跡を生み出し、更なる発展を志向している。小島会長の還暦を記念する本特集が、学校経営研究の一層の発展の力となることを祈念する。

（編集委員長 水本 徳明）

これまでの研究を振り返って

筑波大学 小島 弘 道

1. はじめに

本日は、私の還暦のためにお集まりいただき誠に有り難うございます。昭和18年8月8日、「末広がり」というふうにいわれて、ここまで生きてくることができた訳でございます。私はあまり「還暦」というものは好きではないのだけれども、人生の節目であると人にいわれて有り難くお受けするもの道の道だろうと思ひまして、水本・浜田両先生にお世話になることになった訳でございます。

今日の話は、私の研究を振り返ってということでございます。どのような話をしようかな、と思ったのですが、これまでの歩み・生き様を簡単に話していくというのも、場合によれば皆さんの興味を惹くかも知れないと思って（資料に）書いたわけです。

2. 足跡

まず、研究者になろうという動機として、小学校と中学校時代の先生との出会いが非常に大きかったと記憶しています。それから田舎ですから、大字田舎、字田舎ですからね。そこでの職業というのは教員しかない、職業としての教育の仕事、教師の仕事というのが最高の職業である地域であったわけですね。それから従兄弟に研究者になった者がいた。そうした話を耳にすると、私もやってみようかという話になる。何をやるのかという点でも教育以外には考えられない。他のことはあまり考えられなかった。教育ならば教育大が最高だろう、と受験したところ運良くパスしたということでございます。

高校2年生のとき60年安保がありました。そのときに、やっぱり社会に対する関心というのは色々なところから生まれてくるのかな、と思ったのですが、旧制会津中学校に在学中の兄が隣町のお坊さんの家に下宿しながら学校に通っていました。その頃は共産党が元気があったんでしょうか。その辺のグループに入っていたという話も聞きながら、世の中に対する関心を持っていました。高校2年生のときに安保反対のデモをしたというのが自分の自信になっていったのかなという気がします。

大学に入ったら、勉学と社会改革をやっていこうということを思ひまして、最初の頃は読書と酒と議論とデモに明け暮れていました。当時の全学連の委員長が江田五月でした。ドイツ語も勉強したのですが、問題意識がないものですから、授業にも出ないし勉強もしないからわかりっこない。だからやめました。2年生からロシア語を独学に近い形で始めたわけです。分厚い『哲学の基礎』がテキストでした。「マルキシズムとは何か」とかですね、形式的な文章ですから、読書で得た知識

を背景に持っているならば、相当読み込みました。

それから大学院で歴史を研究するか、現実問題の研究にするかという選択肢を考えたわけですが、吉本先生と出会い、話をする中で、現実問題の研究というものを選択してきました。卒論ではソビエトの学校死滅論をやったわけですね。その間、大学紛争——「大学闘争」という人が多い中で、僕はその辺いい加減なところがありましたので「大学紛争」という言葉を使うわけですね——そんなことをしている間に、ドクターが終わった時に神戸大に助手として就職が決まった。ここに高木太郎、小川太郎、三輪和敏、杉山明男、斎藤浩志というような、そうそうたる人たちがいた。8人いた中で全部東大出身でしたね。高木先生が辞めたあとに、私が採用された。神戸大は非常にリベラルな雰囲気、会議で茶碗が飛び交うこともありました。

「就職は絶対あるはずだ」と思って院生時代を過ごしました。就職してから何かをしなければならぬ。ところが、あまり何をやっていいかわからない部分があったものだから、とりあえずやれるもので書いていこうと考えました。教授組織論——小学校での教科担任制とか協力教授組織だとか——その当時吉本先生が盛んにやられていた部分を神戸大の紀要に書きました。それから教職論についても翌年に書きました。研究の系統性ということであると、出来心で何とか形をつくっていくことが大事だという一念でいたものですから、その後の研究に続いていくかどうか、その時点ではまだわからなかったわけですね。神戸大で思い出に残っているもののひとつに、授業研究とか教育実習というものを杉山先生とか斎藤先生たちと学生も含めてやっていって、丹波篠山の山奥に教育実習の指導に行ったりして、夜は酒を飲むという、なかなか実りのある時間を過ごしました。それから三宮、六甲台での酒というものも。これに費やした時間を研究につき込めば相当なものができるんじゃないかとも思いますが、これがなければその後の研究もできなかった、人とのつながりも作れなかったんじゃないかなと思います。

それから奈良教育大学に移って、金子先生がアメリカに行ってお土産に「小島さんにはこういうのが一番合う」と持ってきた。これは今アメリカで注目されているものだ」と。“Deschooling Society”という本、これは「脱学校論」として有名なものですが、これは学生と読みました。ところがこれは難解な本でして、事実上難しい、わからなかったもののひとつです。そのうち篠原清昭君が専攻科に入ってきた。彼は高野桂一先生がいるかと思って入ってきたのですが、そのときはすでに九大に。ただ、彼は高野先生のところにいるのが良かったのか、僕の方のところにいるのが良かったのか、わかりませんね。今あるのは、やはりインターナショナルを酒飲みながら歌った、あの生活があったからじゃないかとわたしは自負しています！高野先生にはそんな“才覚”はない。研究の方はあるけれども（笑）。まあ、そんなことがありました。やはり奈良の時代はですね、神戸と違って、アカデミックさとか、リベラルなものといい、ずいぶん違っていたのではないかと思います。

それで東京教育大学の方に移りまして、私としては筑波大学問題について若干のこだわりをもっていましたものだから、まあ短い期間であれ、教育大に籍を置くということは、非常に大きな意

味をもっていたと思います。吉本先生を送り出す事業をそこでしたことも、非常に大きな思い出となりました。マスコミが相当来た。産経新聞以外は全部来ました。

3. これまでの研究を振り返って

それから研究を省みてということで、お手元の資料に基づいて簡単にお話ししたいと思います。

まあ、どんなことをやったかなあと振り返ってみますとですね、大体「ソビエト・ロシア研究」「教師論」「学校自治論」「主任制」「学校ミドル」それから「校長研究」「学校経営政策」。最近でいうと「教育学の逆襲」とか、最も新しいものでは「学校力」というようなものに分けていくことができるのではないかと思います。それが、いつ頃から始めて現在に至っているのか、というようなことについて、函を末松君に書いてもらいました。大きく分ければ7つの研究のかたまりとしてまとめることができるのではないかと思います。

1つずつ詳しく話すことはできませんが、「ソビエト・ロシア研究」は卒論以来の研究でした。91年にソ連邦が崩壊したことによって、わけがわからなくなってきた。本もない、何も無い、出版されないという事情もありました。また講座を、筑波の学校経営研究室をやっていく場合には、維持していくためには、そういう研究環境の中で研究をやって空白をつくるよりは、もっと日本の問題をやる必要があるし、重要だろうというようなことで、「ソビエト・ロシア研究」というようなものは90年代にかなり縮小しました。しかし、今でもロシア研究会には出て行き、ロシアに行ったりしながら、ほそぼそと研究を続けています。2002年に1週間ほどロシアとサンプトベテルブルクに行って来ました。

教師論のところでは、神戸大学に入って2年目に書いた現代の教職理論ですね。これは「その1」だったんですが、「その2」には続かなかった。ですから、このときの反省から「1、2」をつけるのは止めた方がいいと(笑)。これはやむを得ない事情があったのですが。教師論というのもこれまでの研究の一つの軸になっていたと思います。「著書等」のところにあるように、高倉翔、松原達哉両先生と3人で『実践教職課程講座』全23巻も作りまし、『日本の若い教師』全3巻もつくりまし。最近では、北神先生と平井先生との共著で『教師の条件—授業と学校をつくる力』というものを作って、これは非常に売れているということを聞いています。ただ原稿料は入ってこない(笑)。

それから学校自治論にも関心を持ってきました。私は職員会議論とか、それに関わっての参加論に関心を持っていました。これはソビエト研究の中で当然出てくるテーマでもあるわけです。『学校と親・地域』というようなものを96年に出しました。あれは明治以来の資料に基づいて、それをまとめていく、執筆していく。自分で書いたものは原稿用紙で300枚位。寺崎昌男先生や佐藤秀夫先生たちと、一緒に研究ができたというようなことも副産物であったというふうに思います。先生方の研究の深さと厚さ、そして視野の広さを人間的な面でも感じました。

私は1984年に日本経済新聞に「学校参加」というものを書きました。これは甲南女子大学で開催された日本教育学会で発表したものをみつけて依頼してきたんだと思います。

それから「主任制」「学校ミドル論」というのは、75年に主任制が制度化され、大塚の第5巻にも書いたりしたわけですが、その後、主任の問題をまとめたと思います、全6巻を東洋館から出しました。その中で最近のものは、教務主任のもので、これは全部1人で書くことができたんですが、専門書でこの手のものは日本にはありません。

それから「校長研究」。これは「ソビエト・ロシア研究」がしぼんでくると同時に、「校長研究」が膨らんでくるというか、それに移っていったということでもあるんですね。校長研究は80年代の後半くらいから共同研究としてやり始めました。あの当時は、現在のようなスクールリーダーを大学院で養成するなど、少しも考えなかった、考えることができなかった。その後、リーダーシップ研究の連載などもやりました。スクールリーダー養成の研究が発展的なものとして生まれました。

「学校経営政策」というものは、これまでの研究ジャンルとしていわれてこなかったと思うんですが、積極的にこれを使う、そういう問題意識でこれまでの改革をみていく。研究者にとって自分で生み出せないアイデアというものを世の中が与えてくれる。今の改革が研究を方向付けてくれる。学校経営学を研究するものにとって非常にありがたい世の中だと思います。木岡さんも、最近、『新しい学校評価と組織マネジメント』を第一法規から出しました。彼の場合も、学校評価を選んだけれども、途中何年かは手をつけなかった。やはり、今の改革によって昔のものを蘇らせて、あのような労作が作られていったのではないかと思います。

「学校経営政策」については、ずいぶん書きました。同じものを手を変え、品を変え・・・裏から見たり、下から見たりですね(笑)。それから「新しい時代の学校経営」「学校経営の論点」というテーマで連載をつくりました。

「校長研究」で日本経済新聞に書いたことは私にとって大きな思い出のひとつです。これについては、最後に触れたいと思います。

「教育学の逆襲」「学校力」というようなものは問題意識としては、非常にいいものだったのではないかと思います。つまり今の時代、教育学がなくて困る人がいるか。教師はいなくて困る。教育がなくて困る。教育学がなくて困る人はいるでしょうか。そういう問題の立て方をしました。それから学校における心理主義、教育における心理主義に非常に危機意識をもってました、いま「逆襲」をやって3年目になっているわけですが。最近では、「学校力」というような概念を作り出しております。こういうような話をしたら、ある出版社からさっそく依頼がきました。機会があればまた報告したいと思います。

最後になりますが、スクールリーダーの研究というものが、教育行政や全国の大学、そして教育学研究を動かすという、研究でこんなことをやれたというのは、私にとって初めてです。筑波大学でもこれについて、何とかしていきたいということが、関係者の間で機運が高まっています。場合によればここ(茗荷谷=「大塚」)にスクールリーダーのための夜間修士課程ができるかもしれない。これはまだわかりませんが、これがいま筑波大学で動いていて、そのきっかけは私どもの研究です。それから国立大学協会の博士課程を置く大学の教育学部長会議でも、独法化の後に何もやることが

ない、というようなことが話題になりました。ある人は日経の記事をみて、「今度はあれしかない」ということで、教育学部長会議でそのことが話題になっているということなんですね。これも筑波でいろいろ話をしたんですが、筑波である程度煮詰まってから出していこうということを今のところ考えているわけです。我々の研究は、実践とどう結びつくか、現実とどう結びついていくのか、または現実なり世の中をどうかえていくのか、貢献できるのかということですが、こういうことを身をもって体験しつつあるということで、こういう機会に恵まれたというのは幸せだなと思っています。

以上です。

2003年8月1日

於：筑波大学学校教育部